
花も恥じらう男の子っ!?

緋色ツバキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花も恥じらう男の子っ！？

【ZPDF】

Z1249F

【作者名】

緋色ツバキ

【あらすじ】

田舎まし時計の音で起きて、洗顔のために洗面所にいく。そこまではいつもと変わらない日常だった。なのに、なのに…「なんでボクが女の子になっているのー！？」そう、鏡の中に映るボクは紛れもなく『女の子』だった。

ボク、女の子になりました

『時間です。起きあましょ~。時間です、起きあま』

パンツと田覚まし時計を叩いて無機質な声を止める。

「ふあ～～～もう～～時なの？」

寝た感じがあまつしないから、今が7時じゃないことを祈ったんだけど決まった時間に鳴る田覚まし時計が時間を間違えるはずもなくて、やっぱり時間は7時だった。

「～～～なんだか妙に気だるいんだよね～～～」

うーうー唸りながらもボクは布団を捲つて上半身を起してした。

違和感を感じたのはその時だった。

「え？ 髪の毛？」

思わず呟いてしまっていた。

だつて、肩くらこまでしかないボクの髪の毛が腕にかかるほどの
はずがない。

どひせ姉さんが寝てる間にウイッグでもつけたんでしょ、と思ひな
がらウイッグを外そうとした。

「…つて、えー? ウソー? とれなー? …」

あわててボクはベッドから立ち上がり洗面所に姿を確認しようと
歩踏み出した瞬間

「いだつー?」

パジャマの裾を踏んでしまい、顎を床に打ち付けてしまった。

「つー、ちよつと待つヒよ。パジャマの裾はピッタリだつたはず…

同時に、血の気がさつとひいた。

一刻も早く姿を確認しないと

そんな思いに駆られながら、一階の自室から一階の洗面所へと転がるよつとして進んでいく。そして、ボクは現実を知った。

「嘘… でしょ？」

髪の毛が長くなっていたのも、パジャマの裾を踏んでしまったのも、なぜか声がいつもより高いのかも、田の前の現実が正しければ説明がつく。

つまりボクは、

「女の子になっちゃったのー!？」

鏡に映つてるのは小学校高学年くらいの女の子だった。

金髪のストレートで腰辺りまであり、肌は白く、一田見て美少女と分かんへりい整つている。

つこで元気になら、女の子の顔は驚きで染まつていた。

「どうしたのよ… って、あなた誰!ー?」

「あ、ゆき姉！！」

戸惑うボクのところに救世主が登場。

茶髪の長い髪をおろしたまま、ゆき姉は一歩かにゆつてきた。

事情を話そうとしたボクに飛び付いた姉はそのままボクを抱きしめてきた。

ちなみに、ゆき姉は長身なので今のボクの体格じゃ抗うこともできず大きな胸に顔を埋めることしかできない。

「ん――！――ん――！――」

必死に叫ぼうとするが、胸に顔を埋めているため声が出ない。

ボクはゆき姉の胸で窒息死するのか…、なんて思いながら徐々に意識が遠退くのを感じた。

「で、鏡をみたら女の子になっていたと」

意識が戻ったボクは椅子に座つてゆき姉に大まかな出来事を話している。
けれど、どんどんゆき姉の目が疑わしそうになつていくのはなぜだ
ら？。

「君ねえ… つくならまいかよつとましな嘘をつきなさこよ」

「…」

「ちよ、ちよつと泣かないでよ…」

立ち上がり、ボクを後ろから抱きしめてくれるゆき姉。

後頭部にあたる感触が気持ちいい。

「信じてくれる?」

「うう…わ、私が出す質問に答えてくれれば信じるわ」

見上げながら訊ねると、ゆき姉はなぜかそっぽを向いた。

「わ、私たちは昔ある大切な約束をしました。その約束とは?」

大切な約束。

多分それはあの日交わした約束のことを言っているんだと思つ。

両親を失つたボクらが、絶対に一緒にやつて誓いついた約束。

「…わからない?」

「分かるよ。あの日、ボクらが両親を失つたとき。ずっと一緒にやつて約束したこと」

「…………」

言った瞬間、ボクはきつと抱きしめられた。

「ゆき姉…」

「グス……」めんなわ…」

「……」

無言でゆき姉の背中を撫でてあげる。

しゃくりあげていたゆき姉がだんだん落ち着いてくるのがわかつた。

「もう大丈夫。じめんなさい…」

「それより、信じてくれる?」

「ええ、君は正真正銘私の弟よ、哥ウ」

「…………ゆき姉…」

『九一八』

思わず抱きついてしまったボクの頭をゆき姉は優しく撫でてくれる。

「それにしても、問題が山積みね……」

「あ、そうだね……。学校とか」

「学校は運よく4月だから新入生として入ればいいわけだし……まあ学校は私がなんとかするわ。それより服よ、服」

「あ…」

そういえば、ボクは男物の服しか持つてないんだ……

「お姉のじやダメ?」

「コウに私の服が合うと思つて。中学生のいるのやつでもコウじや大きすぎるわよ」

「うう… ゆき姉、背高こもんね…」

「私が高いのもあるけど、コウガむちむち。男の子のときでも確か150センチくらいしかなかったじゃない。今なんか、140センチくらいしかないんじゃない？」

ゆき姉は身長170センチで中学生の頃から今の（男のときの）ボクより大分背が高かつた。

「…って、そういうえば私の小学生の頃の服があつたはずだわ。それを見て今から服を買に行きましょう」

「え…うん」

「じゃ、ほり早く着替えて」

追いたてられるようにしてゆき姉の部屋に案内される。

その時のゆき姉の顔はなんだかすゞく楽しそうで、ボクは少し不安になってしまった。

お姉さんと買い物（一）（前書き）

風邪を引いてしまい更新が遅れました…

ちなみに今回まゆお姉空氣ですので、注意を

ゆき姉と買い物（1）

「これ！絶対これよ！ああ～もつめちやくひや可愛こわあ

語尾にハートマークでも付きそつた勢いで抱きしめてくるゆき姉に
ボクは苦笑するしかない。

でも実際、ピンクのワンピース姿で鏡に映るボクは妖精のよつと可
愛いかった。

「よし、それじゃ早速駅前のショッピングモールにいきやがよー。」

「へ、つる」

興奮気味のゆき姉に手を握られながら玄関ドア（ゆき姉のお出で）
をはいて家を後にす。

どんな服を買つか想像してみると、二つの間にかショッピング
モールに着いていた。

まずゆき姉が一番最初に向かつたのは可愛い系の服がたくさん置い
てあるところ。

ゆき姉が田を輝かせて服を選び出すので声を掛けづらかったボクは
とりあえず店内を物色することにした。

「あ、これとか可愛いかも」

数ある服の中でも真っ先にボクの目を引いたのがピンクのフリフリ
がついたスカートだった。

「結構いいかんじだよねー……」

ボクが着ているところを想像してみる。

…うん、大分可愛い。

「お姫様、よろしければ試着してみますか?」

「ひゃわっー?」

「きやつー? ビ、ビうかなかまつたか! ?」

「あ、いえその…えーっと…い、いきなり声をかけられたのでびつ

くつしてしまつて…。「」めんなさ…」

「あ、それは大変失礼しました。で、どうでしょ、試着なさいませんか？」

店員さんは一ヶ口と微笑みながら店の奥にある試着室を指差した。

ゆき姉はゆき姉で色々選びまくつてゐみたいだから試着しにいっても問題はないよね。

「じゃあお願こしまく」

「では右の試着室へまいりまく」

店員さんの後をついてゆきスカートを手にして右の試着室に入る。

鏡に向き合つて、スカートに足を通したところで気が付いた。

「ボク、スカートの付け方知らないんだつた…」

「いかがでしょうか?」

「あ、あの…。」それが…付けれないんです…」

「あ、それでしたら私がやりましょうか?」

「う…お願いします…」

恥ずかしこなれ、」
は店舗さんには頼むしかない。

「ふふ…。」
の服は可愛らしく、絶対にお客様にあります

です」

「あ、ありがとうございます…」

警められて照れているボクに笑いかけながら店舗さんはスカートを
付けてくれた。

「どうですか…?」

「ふふ。とても似合つてますよ」

「って、なんで頭撫でるんですか!…?」

「あ、すみません… お客様があまりにも可愛らしかったので…。気分を害されたのなら謝ります…」

「い、いえ… 謝らなくても大丈夫です」

「分かりました。その服、いかがなさいますか?」

「うーん… ゆき姉に頼んで買つて貰おうかな…

今さら服が一着増えたからって気にする人でもないよね。

「えと、連れの人人が買つてくれると思います」

「ではレジの方で預かっておきます。また何かありましたらお呼びください」

「はい」

大切な店員さんはスカートを手にレジへと戻つていった。

「わい、ゆき姉は…いたいた」

まだ服を漁っていたゆき姉のところに、店員が買いたい服があるとこつてレジへと向かった。

まあ、その前に大量の服を試着させられたけどね…

そのあとあの店員さんに服を袋に詰めてもう一、店を後にした。

店を出ると同時に頭を撫でられたけど…まあよじひとみね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1249f/>

花も恥じらう男の子っ!?

2010年10月11日01時45分発行